水の天使が水教育の指導者に

国際的体験型プログラム「プロジェクトWET」で

修了証を手にする柴田さん

２０１５年度ミス日本「水の天使」柴田美奈さんが11月18日、プロジェクトWETのエデュケーター認定を取得した。

プロジェクトWETは、米モンタナ州に本部を置く「プロジェクトWET財団」が開発した、幼稚園児から高校生を対象とした体験型水教育プログラム。上下水道はもちろん循環性や物理的・化学的特性、水資源やその管理の必要性など水に関わるさまざまな側面が広く盛り込まれ、また単なる講釈ではなく、自ら考えながら楽しく学ぶための工夫がなされている。

現在、世界66以上の国と地域で取り入れられているが、日本では唯一河川財団が使用権を取得しており、平成15年からプロジェクトWETジャパン事務局を運営している。財団所属のコーディネーターは、ガイドブック（製作＝米国本部、訳＝河川財団）等に基づく講習会を通じて、子どもたちへの指導を行う「エデュケーター」と、エデュケーター育成のための講習会を開くことができる上級・普及指導者「ファシリテーター」の養成に取り組んでいる。

講習会は全国各地で年間約50回開催され、小中学校等の教員をはじめ、関係団体やCSRに取り組む企業、教員を目指す学生など、幅広い層が受講している。現在国内のエデュケーターは約7000人、ファシリテーターは約300人に及ぶ。

受講者のみ取得できるガイドブックには、60以上のアクティビティ（ゲームプログラム）それぞれの狙いや実践方法、必要となるワークシートなどとともに、日本の小・中学校の学習指導要領との関連表も掲載されている。

丸一日かけての講習会では、初対面の参加者同士がグループを組み、ファシリテーター主導のアクティビティを体験していく。そして最後は自らが教師役となって他グループにアクティビティを実践させ、その行程を評価し合う「ピア・ティーチング」を実施。各アクティビティは「体験」とその後の「振り返り」を通じて「暗黙知」を「形式知化」させるSECIモデルに基づいているが、講習プログラム自体がこのモデルに沿った構成となっており、教育ノウハウとその効果を同時に体得できる仕組みだ。

4人のメンバーとチームを組んでプログラムを受講した柴田さんは、ピア・ティーチングで他チームに披露するアクティビティとして、河川を流れる水と水系を身体運動で模倣する「ブルービーズ」を選択。インタビュアーとして参加者の感想を聞く「振り返り」を担当した。限られた時間と道具で効果的なアクティビティを実践するべく、初めて出会った年齢も出身も異なるメンバーと真剣な面持ちで向き合ったが、本番では大きな笑みがこぼれていた。

プロジェクトWETの詳細はHP（http://www.project-wet.jp/）まで。

驚きと発見を子どもたちへ ～講習会を終えて～

資格を取得した柴田さんから、プロジェクトWET事務局の菅原一成さんに受講の感想をぶつけてもらいました。

柴田　改めて、プロジェクトWETの一番の狙いは何でしょうか？

菅原　特別な知識がなくても、ゲーム形式の体験型プログラムを通じて楽しく学んでほしいということですね。「水」や「水教育」というとすごく敷居が高いように感じるかもしれませんが…。

柴田　確かに丸一日の受講でしたが、体感時間はあっという間で、もっと受けていたいと思うほどでした。皆で楽しんで勉強できるのって素敵ですね。

菅原　積極的な姿勢で受講いただき、ありがとうございました。さまざまなアクティビティを体験していただきましたが、特に印象に残ったものはありますか？

柴田　どれも興味深かった中で悩みますが、普段から下水道分野で活動や勉強をさせていただくことが多いため、「殺人鬼は誰だ？」（自らを探偵に模し、コレラが発生し多数の感染者・死者が出た町を舞台に、1枚の地図と、カードから得るヒントで発生源を突き止めていく推理型ゲーム。実際に1854年に発生したロンドン・ブロード街でのコレラ大流行と、その原因が公共用ポンプ井戸だと突き止めたジョン・スノー博士の功績を題材にしている）は、特に「これこれ！」と感じる身近なアクティビティでした。簡単すぎず難しすぎないのも良かったです。

推理を体験すると、水媒介の病原菌の存在や恐ろしさ、また上下水道がその解決に大きな役割を果たしたことなど、さまざまな知識がストンと頭に入りますね。

菅原　おっしゃる通りで、伝えたいゴール（知識）は同じでも、自ら経験し発見していくのと、ただ一から講釈を受けるのとでは、理解のされ方も変わると思うんです。

今日一日の講習で生徒と教師役の両方の立場に立たれ、そうした気づきをもってエデュケーターとなられた柴田さんの今後の活動と発信に期待しています。

柴田　今日の講習会を通じて水への理解、そしてそれを普及していくためのスキルを少しでも身に付けることができたのではと感じています。私自身の水の天使としての任期はあとわずかですが、得られた驚きや発見を活動に役立てるのはもちろん、それ以降もぜひ、エデュケーターの一人として子どもたちに伝えていきたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

余水吐

◎…水の天使・柴田美奈さんが参加したプロジェクトWETエデュケーター講習。記者も講習会に入り、取材に並行して受講した。同じグループには水関係のNPO団体職員、工場の排水処理部門に勤務し、その関係で地元小学生にCSR活動を行う方など。彼女は宮崎県からの受講という。

◎…頼もしいメンバーとともに挑戦したアクティビティは「流域さがし」。地図を基に、都府県や市町村界とは異なる「流域」という定義を、そしてそれを把握するための「本川」「支川」の存在から、子どもたちに理解してもらうためのプログラムだ。これをスムーズに実践してもらうための教え方を考えながら、記者の頭に浮かんだのは〝反省〟の二文字である。

◎…洗練された、楽しさと融合した水教育プログラムを前に、記者として伝える難しさは言うまでもなく、果たしてそのアプローチ手法はどれだけのものだったかと振り返る。運よく教える側であるエデュケーターの一員に加われたが、依然、一知半解の徒である。研鑽を積まなければと身を引き締める日となった。